
Re:all_World// **りあるわーるど**

渋谷明日香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Re：all | World / りあるわーど

【Nコード】

N3504A

【作者名】

渋谷明日香

【あらすじ】

後、数分で、いよいよ2005年も終わる。今年はホントにいろいろあったな。あたしは、夏の出来事を思い出した。

#00・Prologue / ぶろろーぐ

12月31日。今年もまたK-1とか何とか言う番組がやるらしい。男二人が一年の終わりに殴りあって視聴率【すうじ】をとる。全く日本はどうなっちゃってんだか。お笑い好きのあたしにとつて、全くだいいものじゃない。リビングには当然一つしかテレビはないし、お父さんはそのK-1に夢中だ。テレビに向かって「いけっ」とか「そこだっ」とか言ってる。後ろから見るとだいたいぶあほうだけど、かわいそうだから黙っておこう。

まあ、とにかく、そんなあたしは手元のテレビが見れるお母さんのケータイを借りて、お笑いを見ている。やっぱこっちは楽しい。客が笑うとすぐに画面が乱れるけど…我慢。

「おかあさん。ご飯まだあゝ？」

別にお腹は吸いてないけど言ってみた。お母さんは「もう少しよ、待つて」と急いで食器をだしてくれた。

「ごめん、嘘。ゆっくり作っていいよ」

と言うタイミングを見失った。まあ、いいや。ごめんね、ママ。

私は次第に、お笑いにも飽きて、お母さんのケータイを卓上充電器に戻した。「ピッ。」とケータイが言う。「充電開始！」と意気込んで。

ああ、そうだ。友達に「あけましておめでとう」メール送る準備しておかなきゃ。遅くなったら届かないからね。

あたしはポケットから自分のケータイを取り出して、誰に送るかを考え始めた。とりあえず、女友達は全員送ろう。後から「私には来てないよお」とか言われたら困るから。ちなみに、今のは同じクラスの小木野千里のマネだ。属にいう猫被りつてやつ。まあ、面白いから嫌いじゃないんだけどね。周りの男子は「萌えゝ」って感じで千里を見ているから面白い。

あと、誰に送ろう。男子…、彼氏【柳瀬君】と山神だけでいつか。木崎と山村は一応、年賀状送ったし。よし、決定。

「さあ、できたわよ」

何ともちようどいいタイミングでお母さんが言った。さすがあたしとママ。

今日の夕食はミートソースのパスタに天ぷら。何とも異色な組み合わせ。でも提案したのはあたし。昨日、「年越しはパスタがいい」とお母さんに言ったのだ。するとお父さんは「普通にそばがいいだろう」と言っで、20分口論を繰り広げた結果、私だけパスタにしてくれることになった。本当はもつとOffice Ladyがお昼に食べてそうな、ゴルゴンゾーラとかモッツアレラとかバジルとかを入れて欲しかったけれど、専業主婦のお母さんのレパートリーはミートソーススパゲティしかなかった。仕方ない。あたしにゴルゴンゾーラは5年くらい早いみたいだ。我慢。

そんなこんなであたしはエビ天にミートソースをつけて食べている。これがなかなかイケる。エビフライみたい。

「うう、ねえちゃん、何食ってんの？」

階段から降りてきた孝次が、あたしを見て言った。忘れてた。あたしには弟がいるんだった。

「ミート…エビ天。食べる？あげるよ」

あたしはミートエビ天を一口頬張ってから、フォークごと孝次に渡した。

「いらない！！キモい！！」

そう言った孝次だが、あたしの眼力【めぢから】に負けてそれを受け取った。

「うええ…」

「いいから食べる！」

あたしがせかすと孝次は眼をギュツと瞑り、仕方なくエビ天を口に入れた。

「どう？」

「…あ。思ったよりうまい…。エビフライみたい！」

なんだかんだで仲のいいあたし達だ。

「ねえ、紅白みないの？」

孝次が言った。あたしのミートソースで今度はミートイカ天を作りながら。お父さんがそれを見て顔をしかめた。おいしそうなのに。

「あたしは別にいいケド、お父さんは？」

「もういい。あいつは弱すぎる」

テレビを見るとお父さんが応援していたらしい選手が、息を切らしながらカメラに向かって言い訳をしている。ださい…。

「じゃあ、回す」

孝次がリモコンを取って1を連打した。ああ、壊れちゃう。あたしに似て、物使い荒いなあ。

テレビはリモコンの連打命令にびっくりしたように、急に紅白を映し出した。全く知らない人が、バラードを歌っている。んん、そこそこ、いい歌。

「ふああ、腹いっぱいだあ」

「あたしも。もう食べれないや」

「私もよ。お母さんちよつと、食べ過ぎちゃったわ」

紅白もやつと知ってる顔がでたときにあたしは言つて、はし（あたしはフオークだけど）を置いた。ホントにもうお腹いっぱい。

あと3時間で、年が終わる。西の暦で2005回目の年末。

キリストさんは2005歳かな。そういえば、何でクリスマスがキリストさんの誕生日なのに、それから6日たってから西暦がスタートしたんだろう。マリア様、何故ですか？

お腹が膨れて妙な眠気に襲われ、そんな訳の判らない疑問が浮かんできた。どうでもいいっての。

「ダメだ。あたし眠い…一旦寝るね。お母さん、12時ちよつと前に起こして」

あたしはお母さんにそう言ってから、ソファーに横になった。うう、息が…。仰向けは想像以上に苦しかった。

ぐう…、ぐう…、ぐう…。

「彩？もうすぐ１１時４５分よ。起きたら？」

１１時４３分。お母さんにそう言っただけ起きた。まだ眠いけど、せつかくだから起きることにしよう。

「おふあよう」

あたしはみんなにそう言っただけ体を起こした。いつの間にか毛布がかかってる。お母さんかな。

「お母さん、毛布ありがとう」

「え？私じゃないわ。孝次よ」

お母さんは意外なことを言った。孝次、いいところあるじゃん、さすがあたしの弟。

「孝次、ありがとう」

「あ、うん」

あたしが笑うと孝次は少し照れて言った。かわいいやつ。

「ねえ、孝次は友達にメールとかしないの？」

あたしは自分のケータイをいじりながら聞いた。

「うん。面倒くさいし…」

孝次はテレビを見たまま答えた。人と話すときは話す人をみなさいって、お母さん言ってるじゃない、まったく。って、あたしもか。

というか、もうケータイ使えないし…。どうやら、１２時に使えなくなると予想した日本中の人々はちよつと前の５０分頃にメールを送り出したらしい。みんな同じこと考えてるね。シンクロだ。

「勘弁してよオ」

あたしは言っただけ、ケータイを閉じた。山神はいいとして、柳瀬君に送れてないじゃんかあ。

あたしは少しケータイを使う日本の若者と自分を恨んだ。

「電波使いすぎ！つか、女子より先に柳瀬君に送ったくんだったあ」
何だかやる気がなくなった。あと１１分で新年なのに…。テレビで

も、見よ。

あたしは孝次からリモコンを受け取って、1から順にチャンネルを変えた。何を見ようかな。悩む。今年最後に見る番組。来年初めて見る番組。此【これ】物凄く重要。ああ、何見よう。

「孝次く、何見たいく？選んでよ」

「何でもいいし。じゃあ、6？」

何でもよくないじゃん。私はそう思いつつ、6に変えてあげた。そのとき、テレビの画面、右下には「2006年まで後4分42秒」という文字が。少しドキドキしてきた。メールは混雑。孝次はテレビに夢中。お母さんは、お父さんと何やら話をしている。楽しそう。何か、アットホームな感じってやつ。

そんなこと言ってる間にもう4分前だ。メールは…混雑。焦る私。そんなことを知らずに楽しそうに笑うお母さん。

「送信しました。」

そのときだった。ケータイにそんな文字が浮かんた。やった。送れた！

2006年まで後3分。送れたあと、考えたけど、何かものすごくどうでもいいことに焦っていたような。少し位遅れたっていいじゃない。混雑してるんだから。心に余裕ができたみたいだ。まあ、よかった。

ついにカウントダウンが始まった。54…53…52…。ああ、もうすぐ来年だ。今年はホント、いろいろあったよなあ。

あたしはふと、今年の夏のことを、思い出した。

#01・One | Summer | Day / あるなつのひ

2005年の7月28日。夏休みまつさかりのこの日、あたしは同じクラスの友達実由と千里と、買い物に行く約束をしていた。待ち合わせ場所は、駅前の大きなポプラの樹の下。この街に住む日とは大体ここが待ち合わせ場所。街のシンボルである。そんな待ち合わせ場所に午前11時集合。私はギリギリ間に合う、10時54分に家をでた。一応結構気に入っている服装で。

11時ちょうど。ポプラの樹に着いた。まだ誰も来ていない。よかった。一安心して、木陰に入った。

ミーン。ミーン。ミーン。

セミが五月繩【うるさ】い。あんまり汗かきたくないから木陰にいるのにまるで出て行けと言ってるようだ。全く、だから夏は嫌いだ。と言っても仕方がないので、近くのベンチに腰掛た。一応日焼け止めは塗ってある。紫外線め、恐れ入ったか。

あたしがそんなコトを考えていると、ポプラの樹の陰に入っていく人影が見えた。実由かな？

もう一度、セミの合唱の中に入って、除きこんでみた。そこには見覚えのある男の姿がある。誰だっけ？

「あ、速河…おはよ」

「成島？」

同じ学年の成島だった。私服はお互いに初めてみる。結構センスあるじゃん、成島。

「ここで何してるの？待ち合わせ？」

あたしはセミに負けないように大きな声で言った。

「そう。柳瀬と松戸とな」

成島も大きな声で返した。おお、松戸君もくるのかあ。なかなかいいチョイスじゃない、成島。早くこないかなあ。ブルブルル。

突然、あたしのケータイが鳴った。実由からだ。

「ごめん！もう着いてるよね？今千里の家なんだケド千里が何着てくかで、ずっと悩んでるの。もう少し待ってくれる？」

いつものことだ。だから実由に迎えに行ってもらったのに、意味ないじゃんよ。

「わかったよ。なるべく早くね？それから服はきちんと選んだほうがいいよ、じゃあね」

私は、もしかしたら松戸君たちに会えるとまでは言わなかった。しばらく独り占めできるかも。と考えたのだ。でも、二人が来ても、松戸君より柳瀬君のほうが、人気かも。クラスのあたし以外の女子、大体みんな柳瀬君に夢中だもん。まるで松戸君のよさはわかってないみたい。あたしだけならライバルいなくていいけどね。

ケータイをしまい、成島のほうを見るとそこには既に柳瀬君が立っていた。いつの間に。でもまだ、松戸君は来てないみたいだ。残念。

「おはよう、柳瀬君」

「あ、おはよう。速河さんも待ち合わせ？」

「そうだよ。でも遅れたみたいで」

「ああ、そうなんだ。早くくるといいね」

松戸君のほうが全然いいんだけど、柳瀬君が人気な理由は何となくわかる。何ていうか、誰にでも優しいし、それに、かっこいいのに控え目なところがクラスの女子を魅了してるって感じ。まあ、かっこよさは断然松戸君が上なんだけどね。

「あッ！沙奈ちゃん発見」

駅と反対側のほうからそんな声がした。千里だ。棒のついたアメを食べながらこつちを指している。悩み悩んだ服装は結局いつものフリリのついたスカート。まあ、千里にはそれが一番似合うかも。

「柳瀬君と成島君もいるじゃあ。どおしたの？」

千里は成島に体を寄せて聞いている。成島は少しにやけた。全くもう。

「てか、ホントに何で柳瀬君たちいるの？」

千里を見てから、実由が小声で聞いた。

「ただ、そこにいただけだよ。待ち合わせなんだって。松戸君も来るんだよ」

「そうなんだあ。よかったじゃない。私も柳瀬君いるし、このままデートでもしちゃう？」

「な、何言ってるのよ…！無理だろう」

そう言ったあたしの顔は激しい熱で赤くなっていた。不覚にも松戸君と手をつなぐシーンを想像してしまった。

「うわ、沙奈、顔めっちゃ赤いよ！」

「実由だって、柳瀬君見たとき超赤くなってたよ！？」

「そんなことないって！」

お互い、柳瀬君と松戸君が好きなことは知っているけど、何だか恥ずかしい。もうすぐ本人が来ると考えると緊張もしてくる。手鏡で、一応確認しようかな。

「よし、大丈夫。あとは平常心だ。早河沙奈、頑張れ」

ちょうど、1年少し前の、部活の大会のときのことを思い出した。

あの頃もそう言っただけとか落着こうとしてたんだよね、あたし。

でも、学校以外で松戸君に会うほうが全然緊張する。本当に、大丈夫だよ。服も、お気に入りだし。ああ、でも不安。

「あ、松戸君！来たんだあ、おはよう」

千里がそう言った。目線の先には、松戸君。やばい！かつこいい…。

「お、おはよう…」

あたしは実由の体に隠れて言った。心臓が痛い。

「あ、おはよう。早河」

松戸君は微笑んだ。「早河」じゃなくて、「沙奈」って呼んで欲しいな…って、あたしは何考えてるんだ。恥ずかしい。

「じゃあ、トリプルデートしよつかあ」

あたしが実由に完全に隠れると、ずっと成島と話してた千里がセミのように大きな声で言った。

ちよつと千里…！そんな勝手に、何決めてんのよ。急にできる分

けないじゃない。それに成島はよくても、松戸君が嫌だつて言ったらあたしは深い傷を負うよ？

一瞬にして、頭の中は混乱寸前になった。急にデートなんて…。

「俺はそれでもいいケド？」

松戸君が口を開いた。良かった、深い傷は負わないで済みそうだ。でも、緊張するなあ…。無理だろう。

「でも俺たちと千里ちゃんはいいいケド、市村さん【みゆ】たちは？大丈夫？」

松戸君に続いて柳瀬君があたしたちを見て、聞いた。実由は、「千里はちゃん付け、私は苗字…」と後ろにぴったりついているあたしにしか聞こえないようにばやいてから、「私は全然いいよ」と言った。実由、ちよつと怖い。

「早河は？」

松戸君が聞いてくれた。あたしは肯定の意味で二回、首を縦に振った。突然の対応はそれが限界だった。でも松戸君はそれを見て微笑んでくれた。よかった。

「じゃあ、千里の特別ルールで行こー！」

千里が元氣よく人指し指を空にかざして言ったが、あたしを含むそれ以外の人は、目を丸くして千里を見た。

「何だあ。知らないのお？せつかく千里がさつき考えたのにい」

「それで知ってたらすごいよ、千里」と、あたしと実由と柳瀬君と松戸君は苦笑した。成島だけが、「どんなルール？」と聞いた。すると千里は、背伸びをして成島の耳元で何かを言った。

「よし。じゃあ、千里ちゃんの特別ルールで行こう」

成島は聞き終えてすぐに言った。

「だから、どんなルールだよ」

松戸君が突っ込んだ。あたしも気になる。

「えっと、まず、男女二人づつになって、デートして…」

「時間になったら組み合わせ変えるの！」

成島に続いて千里が答えた。

「それじゃあ、二人つきり!？」

あたしと実由は驚いて言ってしまった。それじゃあ、緊張して何にできないよ。あ、でもみんなとデートってことは松戸君が好きってことがバレないかも。

「そりゃあ、二人つきりだよ」

千里がブイサインを向けて言った。

よし、頑張れ、あたし。こんなチャンスもうないんだから。ダメだったらそのときはそのときだよ。

「じゃあ、その千里のルールでやろう! いいよね? 柳瀬君、松戸君」

あたしは覚悟を決めて、二人に言った。二人とも、頷いてくれた。まじで頑張ろう。松戸君、覚悟!

「じゃあ、早速順番決めよう。そっちから1、2、3、4、5、6ね」

みんながやる気になったところで、成島があたしたちに番号を割り当て、高そうな腕時計を見た。誰になるだろう。最初が肝心っていうし、終りよければ全てよしっていうし。

「よし、決まった」

だめだ。心拍数が上がる...

「まずは1の人!」

「あ、それ千里のばんごお」

ちなみにあたしは5だ。ここで6ができれば千里と成島になる。とにかく、3【まつどくん】はでちゃだめ。

「1の人は、6! だから俺!」

成島は嬉しそうに言った。千里も喜んでいる。あたしも密かに嬉しい。

「次、2の人!」

「あ、俺だ」

柳瀬君が手を挙げた。5【あたし】になるか、4【みゆ】になるか...。

「2は…4の人です！」

実由はあたしに笑顔を見せて喜んだ。ということは、あたしは松戸君とだ！最初が肝心なんだ、きつと。

「よろしくね」

松戸君があたしの前に立つて言った。うう、軽い目眩…。

「それじゃあ、行動開始！…あ、2時にここに戻ってきて」

成島が言った。もう千里と手をつないでる。「あたしたちも手をつなごう」と言う言葉が喉で詰まった。いや、でも今日しかもうないよね。こんなチャンス。千里に感謝出来るように、頑張らなきゃ。ようし。

「行こう、松戸君」

あたしはそう言って、手をさしのべた。もう、恥ずかしさは、心の奥に隠すことにした。今こそ頑張りときだもん。

「うん。行こう」

松戸君の手があたしの手と、重なった。すごく、特別な感じがする。もう、はなしたくないです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3504a/>

Re:all_World//りあるわーど

2010年10月21日20時27分発行